

城下町凡三千軒程有之、壹軒も不殘流失、漸町屋三十六程残り候へ共人は一人も無之候、御座船壹艘、御召替壹艘、水主十人、

御要害人御船も無之、勿論商船など其數しれず帆柱計海上所々に相見へ申候、御城下貳里隔り、濱手の方に萩原村と申在所有之候、此所に寺有、是は御城主様御菩提所ニ而、此中に大石の石塔など多く有之候、右大名御城之裏手、御家中屋敷江流れ來り、右之寺者跡形も無之候、

肥後と肥前の間拾里、又は五六里隔り候、右之海中に新規に山壹ツ出來申候、

島原御城付五万石之内、過半流失之様相見へ申候、

御城下町家之跡、一向砂原と成、死人山のごとく、首或は手足折ちざれくに成、目も當られぬ形勢に候、

御城は先無別條、御家中より御城之裏手の分者、水押左程にも無之相見へ申候、外曲輪家中共に不殘流失之體に相見へ申候、

御家老松平勘ヶ由様御屋敷流失、仍而當時板倉八右衛門様と申御家老、御城代御預りに御座候、翌二日、同國佐賀より爲見廻人數騎馬百騎被差向、米五千俵、銀子百貫目被遣之候、御同國大村よりも、御人數并米銀共被遣、其外近領よりも、追々御寄物有之由承申候、大村よりは御寄物の外に、御醫師數十人被遣、藥を木綿大袋に入、後に負せ、又者馬に付來り候へ共、所々者七八分は流死人故、藥用候者は纔にて御座候、御近國御近領に而、島原津浪之節出、命助り候者と申候へば、所々領主様より御養ひ被下、此度召歸候私共五人之者、夜中其泊々にて御養被下、誠に壹錢も貯無御座候處、御影にて大坂へ罷歸り申候、肥後肥前筑後津浪之地、凡四拾里四方と申候、

島原にて、武家町家民家流失之男女、牛馬之斃幾千万人と申、其大數中々急には分り申間敷奉存候、